

text: 国分美由紀 Miyuki Kokubu
編集・ライター。女性誌を中心に活動しながら、まちづくりや
手しごとなど、さまざまな「ひと・もの・こと」について執筆。

photo: 関根義人 Yoshito Sekine
映像クリエイター。「100年先に伝える」というテーマのもと、
日本文化を中心とした幅広いコンテンツ制作を手がけている。

tatsumaki issue
"Soil"
6

ビオトープ であそぶ。

青々と生い茂る生垣の間をすりぬげると、目の前に広がるのはどこか懐かしい景色。

ここは、千葉県白井市。「まどかガーデン」という名のビオトープ。

ふかふかの土、大きな空と生きものたち。それだけで、駆け出したくなるのはなぜだろう。

学園長の吉岡 量さんに聞いた「まどかガーデン」のはじまりと、これからのこと。

text: Miyuki Kokubu, photo: Yoshito Sekine, Special thanks: Madoka garden

Biotop??
ビオトープ

BIOS(生きもの) + TOPOS(場所) = ビオトープ。
地域に暮らす生きものすみかを目指す言葉。季節
を感じ、生きものに触れ、環境について考えるき
っかけの場として注目されています。



生きものにであう



風船かずらを
見つけたよ



木登りをして、虫を探す。そんな場所がほしかった

まだかガーデンのはじまりは、2007年。
きっかけは、まだか幼稚園の学園長を務める吉岡量さんが見つけた大きな空き地。「印旛沼や手賀沼に面した白井市の豊かな水と緑は、開発で失われつつあります。だから、いつか子どもたちが地域の自然や生きものに触れられる場所を作ろうと考えていました」
まっさらな空き地に杭を打ち、約400本の木を植栽。子どもたちと造成した池や田んぼに揺れているのは地域の植物。観察できる生

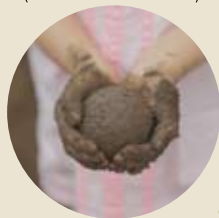
きものはトンボだけで20種を越え、昆虫なども含めると、その数は50種以上！
たっぷりと枝を伸ばしたモッコクは、子どもたちが登りやすい枝振りの木を探しまわって、ようやく見つけたもの。「赤実木」という別名の通り赤く色づいた果実は、女の子の手にかかれば一瞬で宝石に変わってしまう。
カブトムシの幼虫やバッタの親子にオオカマキリ。生きものの気配を全身で感じながら遊ぶ子どもたちも、ガーデンが完成した頃は

虫を見つけることさえできずにいたのだとか。「どこで何をして遊べばいいか見当もつかなかった子どもたちが、いまや大人が想像もつかない場所で虫を捕まえてくるから面白い」
戸惑ったのは大人も同じ。最初は先生たちでさえ、空き地に生きものと呼ぶ意味や、広がる景色を想像できず、手探りでスタート。「いまでは、先生も子どもと同じ笑顔になれる。時間はかかったけど、ようやく“みんなの”まだかガーデンになった気がします」



土にふれる

大きな泥だんご
できた!



子どもたちの「おだんごコレクション」。
肌質や大きさに個性がくっきり。

大人が本気で楽しめば、子どもも夢中になっていく

ガーデンにやってくる子どもたちを待つ間、「どろんご広場」をせっせと耕していた吉岡さん。ふかふかの土を使った泥だんご作りは、子どもたちを夢中にさせる遊びのひとつ。「泥だんごは、土の種類や水分量によって、できあがりが変わります。作るたびに発見があるから、何度も作りたくなるんですよ」
気づけば、吉岡さんの手には美しい土の球体。それを見つけた途端、真剣なまなざしでアドバイスを求める子どもたち。木登りも泥

だんごも、先生が本気で楽しむクラスのほうが、子どもたちの上達も早いのだそう。「ただ子どもに『外で遊びなさい』と言うよりも、大人である僕らが土の上に腰をおろして遊んでいれば、子どもは自然に遊びはじめます。大人が夢中になれないものは、子どもだって夢中にはなれないと思うんです」
まだかガーデンが誕生して6年。久しぶりに降る雨を見て「お米はきっと喜んでるね」と話す子どもや、「まだかガーデンに飛んでく

るトンボの種類を調べたい」と相談にくるお母さん。年に3回、20家族限定で行われる親子観察会を心待ちにするお父さん。そして、「将来は、生きものの仕事がしたい」と未来を思い描く卒園児。彼らの変化は、まだかガーデンのこれからをつくる大切な種。
「いまは手一杯だけれど、いつか卒園児を対象に生きものの生態を学ぶ観察会をやると思っています。少しずつ、地域の大人や子どもとつながっていただけると嬉しいです」